

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成 II

－ 2 年間（2017 年度・2018 年度）を比較して－

多田 琴子 高松 邦彦
(神戸常盤大学)

平成 29 年度より、保育職を目指すこども教育学科の 2 年生を対象に、保育ボランティアを奨励している。3 年生で行う保育及び教育（幼稚園）実習までに、大学生としての保育職務能力をある程度身に付けておく必要があると考えたからである。

学内にある附属幼稚園で、学生が日程を調整し空きコマでボランティアを実施するのである。

通年で 10 回を目標とした。季節や学期によって環境も行事も異なる幼稚園に継続的に関わる機会となり、子どもの様子を体感することで保育者に必要な職務能力に自ら気付く職能形成の場となった。

学生の職能形成向上に対する意識の自覚は、2 ヶ年とも、活動を振り返り設問に答える形で行い、本稿はそれを集約したものである。2 ヶ年ともボランティア内容、学生の具体的行為に大差は無い。

設問毎にキストマイニングにかけ、MBS・ネットワーク・頻出語の基礎資料を作成し 2 ヶ年を比較しながら結果を考察し、空きコマボランティア体験の意味と今後の課題を見いだした。

キーワード：保育職務能力形成 継続的ボランティア体験 保育職を目指す学生 学年比較

1. はじめに

平成 29 (2017) 年 3 月改訂の、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育教育要領に共通する方向性として、以降の教育につながる 3 つの資質が明示された¹⁾。特に保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、満 3 歳未満児においても教育の視点が明記され、保育者が保育の意図をもって、子どもの育ちの方向性を見据えて保育（教育）することが強く求められる改訂となっている^{2) 3)}。

一方で働き方改革に風を受け、企業による子どもを預かる施設が台頭し始めている。駅から近いデパートや複合施設の一室で保育が始まっている。新しい保育施設を見学すると、手洗い場はセンサーで、手をかざせば自動で程よい量の水が出て、使い捨てのペーパータオルが設置されている。

幼稚園設置基準は平成 17 年 5 月に改訂になり、砂場、滑り台、ブランコの文言が消え、これら子どものための設備（大型遊具を含む）が、最低限必要な設備ではなくなった。

そこで働く保育者は、正規保育者だけではない。同幼稚園設置基準の第五条 2 には、「特別の事情があるときは、教諭等は、専任の副園長又は教頭が兼ね、又は当該幼稚園の学級数の三分の一の範囲内で、専任の助教諭若しくは講師をもって代えることができる。⁴⁾」とされている。その様な設備や人的配置の子どもを預かる施設に、神戸常盤大学で免許取得した学生のほとんどが働くのである。

乳幼児期の教育が目指すふさわしい生活は、そこに存在するのであろうか。多様な日本の保育が始まっている今、保育者の仕事内容は如何にあればよいのであろうか。

2. 研究目的

保育職を目指す学生自身が、本大学で学ぶこと、身に付けることからは、授業を受けるだけで身に付くのではない。広い意味でのカリキュラム観⁵⁾で捉えると本大学だからこそ身に付けるものがあると考えられる。

保育職を目指す学生の実習前体験として、本大学の 2 年生に空きコマボランティアを勧めて 3 年目となる。この取り組みを始めるに至った経過は、平成 30 年の保育学会で発表した⁶⁾。また、この 2 ヶ年の空きコマボランティアにおける、指導教員の主観的読み取りとテキストマイニングによる客観的

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成Ⅱ

考察についての考察は、「保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成⁷⁾」にまとめた。

今回の目的は、空きコマボランティア実施学年（2016年度入学生と2017年度入学生）によるアンケート回答を比較することで、学生が捉える空きコマボランティア体験の意味を把握し、今後の課題を見いだしたい。

3. 研究方法

空きコマボランティア終了後にアンケートを実施した。2ヶ年とも設問に文字数制限はない。

1) アンケート項目設定について

空きコマボランティアとは、学内にある附属幼稚園に学生自身が自主的に日程を決めボランティアを申し込んで行うもので、ボランティアで行う活動は附属幼稚園が指示する活動である。1限～3限に行くと、保育補助が主な活動となる。4限以降に行くと掃除や園庭整備、季節の壁面作りが主な活動となる。

基礎研究演習Ⅱの見学体験実習（12コマ）は職業選択の情報収集も兼ねているので、保育園又は社会福祉法人幼保連携型認定こども園か児童養護施設又は知的障害児者施設、幼稚園から一施設を学生が選んで行うものである。

職業選択を見通した基礎研究演習Ⅱの見学体験実習と空きコマボランティアの違いは、実習日誌の有無、評価の有無、直接指導の有無等がある。このことは、学生自身の学びに対する意識の違いによって学びの内容が異なる事が予想される。

アンケート項目は、基礎研究演習Ⅱ見学体験実習についての学びと身に付いたこと、空きコマボランティアで行った具体的内容とその行為からの学び、それによって身に付いたこととした。

つまり基礎研究演習Ⅱの見学体験実習と空きコマボランティアは、同じ学生が同時期に体験する保育現場であるため、実習先施設ごとに体験内容の異なりと重なりがある。学生自身がその重なりと異なりを体感し、アンケートに回答することで振り返りとなり、自身の特性と課題に気づき職能形成につながる。2ヶ年のアンケート回答を比較考察し、研究目的に迫りたい。

2) アンケート設問

- ①基礎研究演習Ⅱ見学実習からの学び（気付いたこと分かったこと）
- ②基礎研究演習Ⅱ見学実習で身に付いたこと（できるようになったこと）
- ③空きコマボランティアの内容
- ④空きコマボランティアで行った具体的行為からの学び
- ⑤空きコマボランティアで身に付いたこと（できるようになったこと）

回答をテキストマイニングにかけ、MBS・ネットワーク・頻出語の基礎資料を作成し結果を考察する。

本稿での解析結果としての共起ネットワークでは、出現数の多い語ほど大きいノード（頂点）で描画されること、共起関係が強いほど太いエッジ（線）で描画されること、ブルーから濃いピンクになるほど媒介中心性の高いノードであることを表す。頂点 v_i の媒介中心性 b_i とは、以下によって定義される、ノード間の最短経路上となる度合である。

$$b_i \equiv \frac{\sum_{i_s=1; i_s \neq i}^N \sum_{i_t=1; i_t \neq i}^{i_s-1} \frac{g_i^{(i_s i_t)}}{N_{i_s i_t}}}{(N-1)(N-2)/2}$$

ただし、 $g_i^{(i_s i_t)}$ は始点 v_{i_s} から終点 v_{i_t} へ行く最短路の中で、 v_i を通るものの数、 $N_{i_s i_t}$ は、 v_{i_s} から v_{i_t} へ行

く最短路の累数である⁸⁾。媒介中心性は、そのノードが万が一欠落した場合、ネットワークは全体の統一性を欠いたバラバラの構造をもつことになることを表している。

3) テキストマイニングについて

アンケートデータのうち、頻度で示される回答に対しては記述統計を、自由記述回答に対しては計量テキスト分析・テキストマイニング⁹⁾を実施した。

計量テキスト分析・テキストマイニングには、フリー・ソフトウェアである KH Coder (Ver. 2.00f)¹⁰⁾を用いた。共起ネットワークについては、Jaccard 係数において描画数を 60 に設定して解析した。

なお、本稿では、計量テキスト分析・テキストマイニングを、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析 (content analysis) を行う手法」⁹⁾とする。そして今回は、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」としての、頻出語の抽出、共起ネットワークの作成にとどめ、「分析者が主体的かつ明示的にデータからコンセプトを取り出し、分析を深める段階」に踏み込んで、分析者がデータに対してなんらかの「評価」を行うことはしなかった。

ここで共起ネットワークを解析に用いた背景について述べる。今回の解析を通して把握に努めたいのは、学生が主観的に捉えた回答の〈意味〉である。〈意味〉とは、たとえば〈梨〉は (日本では)、「黄緑～薄茶色」「食べられる」「甘い」「みずみずしい」「秋」などさまざまな意味を含んでいるが、それは通常目で見えて捉えることはできないものである。そして、〈意味〉とは、「個々独立にではなく、1つの集まりとして」存在している¹¹⁾¹²⁾。クワイン (Willard van Quine)¹³⁾によれば、われわれの知識 (信念) は、1つの集まりとして、相互に構造的に連関し合った1つのネットワークとしてみるべきなのである。

昨今の複雑ネットワークの理論¹⁴⁾では、たとえば、単語の連想実験を行った結果、全体の96%の単語が1つの大きな集団 (連結ネットワーク) を成すことが明らかとなっている。つまり概念や信念は、それぞれ個々独立に切り離されて存在するのではなく、互いに意味的に連関し合い、あるものとは緊密に、あるものとは疎な関係性のもとネットワークを構成し、そうした〈意味〉の張り巡らされた世界を私たちは生きているのである。したがって、今回の解析を通して捉えたいのは、〈意味〉の全容である。

4) 倫理的配慮について

結果の分析などについては研究以外に使用しないことを学生に口頭で説明し、了解を得た。

4. 結果と考察

(1) アンケート設問①の2ヶ年の比較と考察

設問毎に抽出語 150 語の内、上位 25 の頻出語を提示する。ネットワーク図は、2017 年度と 2018 年度を提示する。

※全ての設問に於いて、頻出語数を比較すると 2017 年度に比べ 2018 年度学生の回答文字数が多い。従って単純比較ではなく、設問ごとの学生コメントも合わせて考察する。

1) 設問①の比較

<比較>

頻出語を一見して分かるように、2017 年度より 2018 年度の抽出語総数が多い。結果として、2018 年度は媒介中心性の高いノードからノードへのつながりのない島は 2 カ所のみである。本論文では、中心媒介性の高い語を、中核語と呼ぶ。中核語 (赤で示した) と太い線で結びついている語を比べると、2017 年度は「発達」「全然」「違う」はトライアングルな繋がりが見られ、「ブランコ」を中核語として「援助」「持つ」「姿」「学び」「作り方」「真似」などが繋がっている。

2018 年度の中核となる語は「幼稚園」であるが、太いエッジで繋がっている語は「実習」に「学ぶ」

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成Ⅱ

「見学」「思う」「行く」などである。「実習」「子ども」「先生」は重なっており、それらに中核語の「幼稚園」「思う」が太いエッジで繋がっている。

表1 設問①

基礎研究演習Ⅱ 見学実習からの学び

頻出語 (2017年・2018年)

2017年		2018年	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	110	子ども	124
環境	38	先生	75
遊び	35	学ぶ	73
保育	34	保育	60
構成	29	実習	59
先生	28	見る	34
自分	21	子	33
遊ぶ	18	幼稚園	32
学ぶ	16	見学	31
言葉	15	思う	27
理解	15	自分	25
掃除	14	行く	24
大切	14	クラス	23
子	13	活動	23
考える	11	大切	23
子供	11	言葉	19
見る	10	感じる	18
行動	10	園	16
周り	10	園児	16
生活	10	遊び	16
対応	10	流れ	16
作る	9	時間	15
仕方	9	保育園	14
出来る	9	違う	13
喧嘩	8	掃除	13

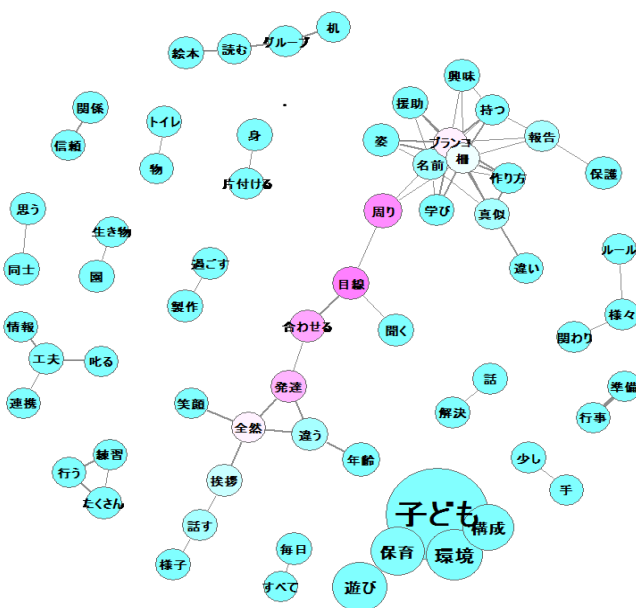


図1 2017年度 設問①ネットワーク図

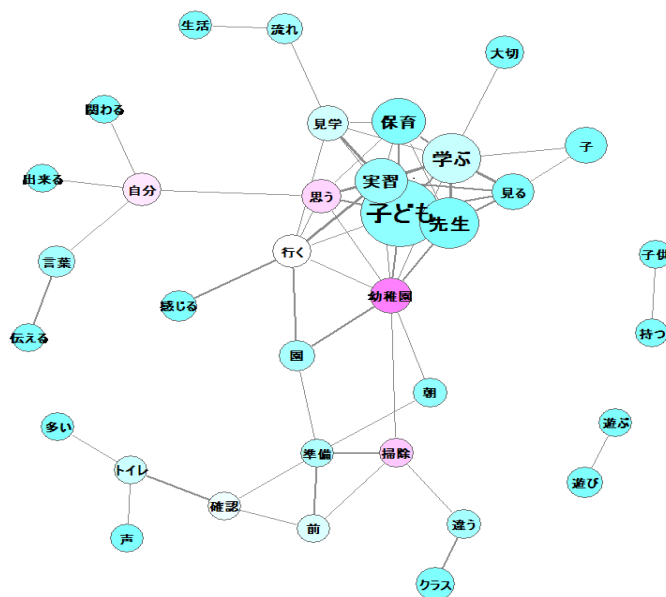


図2 2018年度 設問①ネットワーク図

<考察>

2ヶ年を比較するとネットワークのつながりが少なく複数の島が見られる2017年度と、大きなネットワークで繋がっている2018年度であることが分かる。2017年度は、ネットワークのつながりが少なく複数の島がみられることから、全体として見たときに、回答の内容に繋がりが無い（正確に述べると共起していない）ことを表している。これに対して、2018年度は大きなネットワークで繋がっていることから、全体としてみたときに、回答の内容に繋がりが有る（正確に述べると共起している）ことを表している。これはまた、学生の頻出語からも分かるように、学生の回答文字数の違が2018年度のほうが2017よりも多いため、確率的に2018年度のほうが共起する確率が高いためである。しか

し、「子ども」が第一位の語であることから、保育者を目指す学生の実習に対する意識は、子どもを第一義に考えようとする姿勢と読み取ることができる。

2017 年度の特徴は、頻出語上位から「子ども」「環境」「遊び」「保育」「構成」とあるように、子どもを中心に、環境による保育、遊びの環境構成に着目しているように読み取れる。

学生コメントは「自由遊びの時間には、保育者が年齢に応じたおもちゃや遊びのブースをあらかじめ用意することによって、子どもたち自身がしたい遊びをしながら、成長にもつながるよう一つの遊びにねらいを持って環境を作っている」「環境構成について：私が実習に行った時期は、園全体で「生き物」を取り上げていたため、読む絵本も、置いている絵本もすべて生き物に関するものだった。保育室にかえるやザリガニもいた」「環境構成について：子どもの目線に合わせた保育室や園庭であった。保育室の場所が下の階に年齢の低い 0.1.2 歳児、上の階に 3.4.5 歳児の保育室があった。ブランコの周りには柵。ロッカーや靴箱が 1 人ずつあり、それぞれ自分の名前または自分のシールが貼ってあった。動物などの生き物がいた」とあり、遊びを促す、遊びを継続させる環境構成の大切さに気付いたコメントが少なからず見られた。

2018 年度の特徴は、エピソードを書いている学生が多く、記述内容が多い。そのため傾向を読み取りにくい。しかし、丁寧に学生のコメントを見ていくと、1 日の流れを書いている学生が複数いた。

「1 つ目は保育所の 1 日の流れを知ることができたことです」「〇〇幼稚園では朝にドキドキタイムという体をたくさん動かす活動を行なっています」「1 日ずつ年齢の違うクラスに入らせてもらいました。年齢が違くと 1 日の生活リズムがとても違うことが分かりました。特に乳児と幼児では生活のリズムが全く違うように感じられました」「まずはしっかりと頭で 1 日の流れを掴むことが大切だと学びました」とある。ネットワーク図の上部に、「生活」「流れ」「見学」とあるように、職業選択を見据え、保育園・幼稚園・施設で実習をしていることが分かる。

大きく違う点は、「遊び」「遊ぶ」という語が 2017 年度は 3 位と 8 位にあり、2018 年度は 18 位に見られることである。2018 年度のネットワーク図のつながりのない島に「遊び」「遊ぶ」がある。このことから、2018 年度は「遊び」を通して保育が展開されるという意識をもたずに実習に臨んだと読み取れなくはない。しかし、2017 年度に 6 位の「先生」という語が 2018 年度は 2 位にあり、ネットワーク図でも「子ども」に重なっていることから、2018 年度は「先生」に着目して実習を行っていたことが分かる。

2) 設問②の比較

<比較>

実習で身に付いたこととして、2 ヶ年で共通していることは、第一位の頻出語が「子ども」である。しかし、ネットワーク図を見ると、中核語に係っているのは 2018 年度で、2017 年度はネットワーク図には「子ども」からのつながりはなく、同義語の「子供」からのつながりは見られる。

25 位までの語を比較すると、2018 年度の語は 2017 年度の語のほぼ 3 倍である。ネットワーク図の 4 語以上のつながりを島として数えると、2017 年度は 3 島で、2018 年度は 6 島である。また、25 位までに重なっている語は「子ども」「先生」「身」「見る」「自分」「保育」「声」「行動」の 8 語である。

<考察>

設問は「実習で身に付いたこと」である。2017 年度は、頻出語から「挨拶」を身に付けたと述べていると思われる。ネットワーク図からは「周り」を「見ること」、子どもに「遊び」「遊ぶ」が「必要」であること、「広い」「範囲」を「見渡せる」「目線」や「立つ」場所を考えることなどを身に付けたと読み取れる。

学生コメントには、「挨拶が進んでできるようになった」「子どもの目線までしゃがんで話す」「子どもの目線に立ってみて、危険なところや気になることを見つけることができる力」「同じ目線に立つだけでなく、気持ちに寄り添う、一人一人の子どもを見る」「保育をしている先生方はとても広い範囲で

れず先生の話を受けない場合は、子どもに構わず側から離れるようにする」「担当した 3 歳児の子どもは私よりもとても小さくかかんでちょうど視線が合うくらいの身長だった(後略)」「4 歳児(中略)、早く遊ばせてあげようと思えば？次は？と声かけしながら手伝ってしまっていたのですが、出来ることは自分でやらせないといけないと先生に教えていただき、(後略)」等のコメントからも「先生」に着目して実習しており、端的に身に付けたことだけを述べているのではないことが分かる。

3) 設問③の比較

表 3 設問③

空きコマボランティアの内容
頻出語 (2017 年度・2018 年度)

2017年		2018年	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
壁面	64	掃除	104
掃除	46	子ども	80
保育	42	保育	42
環境	41	制作	36
整備	37	ボランティア	34
内容	37	学ぶ	34
補助	33	コマ	33
作る	30	壁面	33
具体	22	空き	26
誕生	18	見学	25
子ども	16	先生	25
行く	13	準備	24
回数	12	製作	23
運動会	11	作る	22
落ち葉	11	使う	19
清掃	10	行う	18
庭	9	園児	17
貼る	9	思う	14
カレンダー	8	活動	13
音楽	8	教室	13
季節	8	仕事	13
準備	8	掃き掃除	13
絵の具	7	クラス	12
作業	7	階段	12
拭く	7	帰る	12

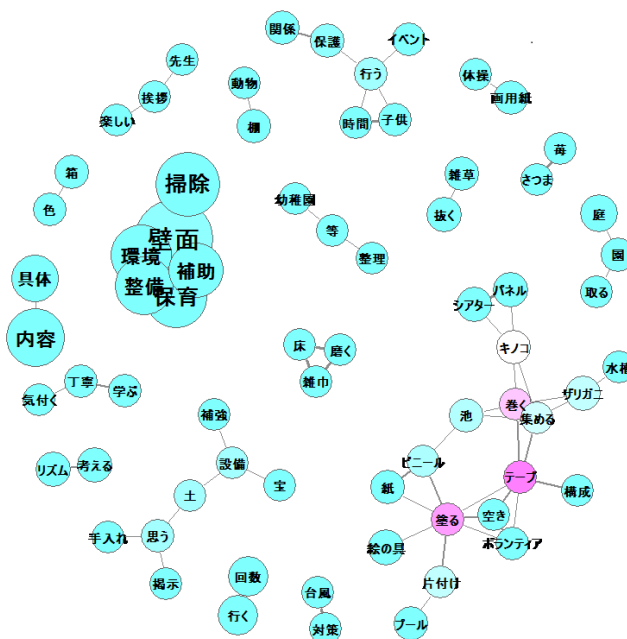


図 5 2017 年度 設問③ネットワーク図

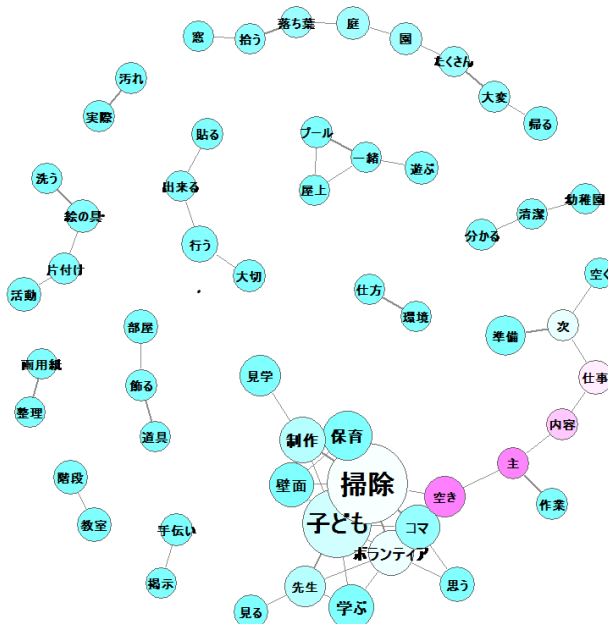


図 6 2018 年度 設問③ネットワーク図

<比較>

2ヶ年とも「掃除」は上位1位2位に出現している。2017年度の学生は、空きコマボランティアの活動内容を簡潔に記述し、2018年度の学生は活動内容から学んだ事柄まで記述している傾向が多く、抽出語総数に違いが出ている。また、2017年度の媒介中心性の高い抽出語は、「テープ」「塗る」「巻

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成Ⅱ

く」と具体的活動をイメージさせる。2018年度は「空き」「主な」「内容」「仕事」とあり、学生一人の使用する語数の違いから媒介中心性の高い語は異なるが、具体的な活動体験が保育の意図を学ぶ体験であったことが分かる。

<考察>

「掃除」が上位1位2位に出現していることから、この取り組みの主旨である、保育という活動に入るまでの保育職務能力（生活力）を付けておくことを体感していると捉えることができる。

2017年度の学生コメントに「草を抜いたり、トイレや教室の掃除をしたりしました」「保育室の掃除子どもたちのロッカーをキレイにする 子どもたちが使った絵の具を全て洗う」「ザリガニの水槽の清掃作業、窓の清掃作業、部屋の清掃作業」「次の日が参観日だったので、保護者の目につくところを掃除する」「幼児が普段使って汚れているところを掃除する」「子どもが1日を楽しく過ごせるために衛生面からも環境を作っていくことが大切」とある。

2018年度は「掃除は楽なことじゃないけどきれいにすることで子どもたちが室内であっても外であっても思いっきり活動することができるのでないかと空きコマボランティアを通して学びました」

「お掃除では、小さな子どもたちの教室のおもちゃを消毒したりしました。これはこどもたちがおもちゃを口の中に入れてもいいように、清潔に保つためだということを知りました」とある。

このことから、空きコマボランティアの内容は「掃除」が大半であり、その掃除から学びとして、綺麗に環境を整える事で、子どもが明日の生活を気持ちよく始められると考えていることが分かる。

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成Ⅱ

するかが大切ということ」「子どもたちは自分で『こうだ!』と思ったタイミングで楽器を叩くため、正しいリズムを何度も丁寧に教えてあげないといけない」「子どもが作った工作を貼るために保育者が先にたくさんの時間をかけて準備している」とあり、総語彙数は少ないが端的に学びを述べている。

2018年度の中核語は「作る」である。「空き」「コマ」「ボランティア」で「壁面」「制作」を「作る」を主に「学ぶ」ことができたことと示している。更に「掃除」においては「拭く」「子ども」「大切」「考える」などのつながりから、明日の子どもの活動を「思う」て、自らの活動を行ったと読み取れる。

学生コメントは、「子どもが充実して遊べるのはきれいで清潔な場所でありそのためには掃除は大切なんだと感じることができました」「ペットボトルを切ったり、折り紙を色別に分けたり教室に飾る作品を作ったりと先生達が裏でやっていることも経験させてもらい、細かい作業などもどのようにして作っているのかを知ることが出来ました」「(前略)保育士になったら必ず行うことなので実際に飾る壁面を作ることができて良かったし、画用紙を用いて動物をつくったりする力が身につけてよかった。また効率良くみんなで作業を行うために細かい作業が得意な人は細かい作業をという風に、協力しあって作業することができた」である。このことから、2018年度は、保育補助のできる14時までボランティアを行っている学生が少ないことも把握できた。

また、学生の学びが7つの島に分かれている2017年度に比べ、2018年度は、ネットワーク図上で語と語が太い線で繋がっており、2018年度の学生は学びの傾向が繋がっていることも読み取ることができた。これは情報量の違いなのか、学生気質の違いなのかについては検討事項として残しておく。2019年度のデータを待ち比較したい。

5) 設問⑤の比較

<比較>

2ヶ年とも「空き」「コマ」「ボランティア」で「身」に付いたこととして「掃除」を挙げている。設問④の学生コメントにもあるように、学生の自分が「掃除」の「仕方」を「身」に付けることの意味を、「子ども」の「幼稚園」での過ごし方に引きつけて考えているといえる。また、2ヶ年とも「壁面」作りで「画用紙」を「切る」ときの技術を身に付けたことが分かる。

異なる点は、2017年度は中核語の「細かい」「効率」「良い」「コツ」「壁画」「周り」「洞察」「構成」がつながり、それらにそれぞれ具体的な学生の気付きが具体的な語として見受けられる。例えば、「隅々」まで「落ち葉」を掃除し「季節」を「感じる」である。また、「ホッチキス」で「画用紙」を止めて「切る」や、「丁寧に」「出来る」し「速い」となどの語がつながり、何を身に付けたかを読み取ることが出来る。

一方2018年度のネットワーク図からは、具体的に身に付けたものとして、語のつながりを見つけにくい。

表 5 設問⑤

空きコマボランティアで身に付いたこと
 頻出語 (2017 年度・2018 年度)

2017年		2018年	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
壁面	23	掃除	64
子ども	22	身	63
掃除	21	子ども	59
挨拶	12	先生	51
考える	10	ボランティア	47
作る	9	コマ	41
仕方	9	空き	32
大切	9	思う	32
身	8	自分	27
大変	7	学ぶ	26
保育	7	仕方	21
環境	6	壁面	21
行動	6	保育	21
作り方	6	制作	18
仕事	6	言う	17
笑顔	6	作る	16
楽しい	5	時間	16
見る	5	行う	15
先生	5	実習	15
多い	5	行く	14
工夫	4	製作	14
少し	4	考える	13
常に	4	聞く	13
方法	4	園	12
力	4	関わる	12

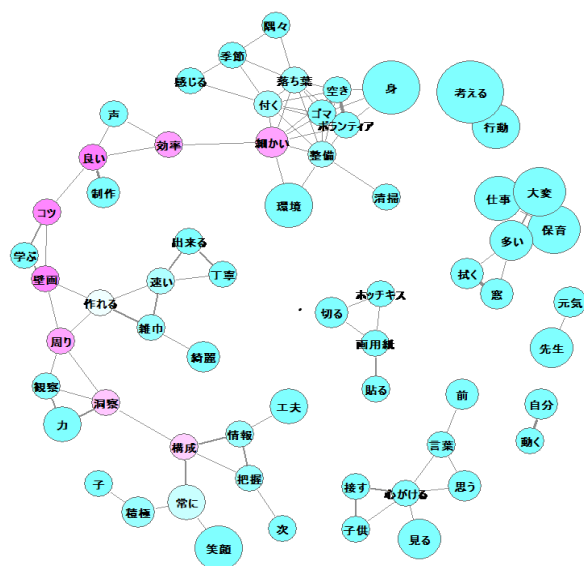


図 9 2017 年度 設問⑤ネットワーク図

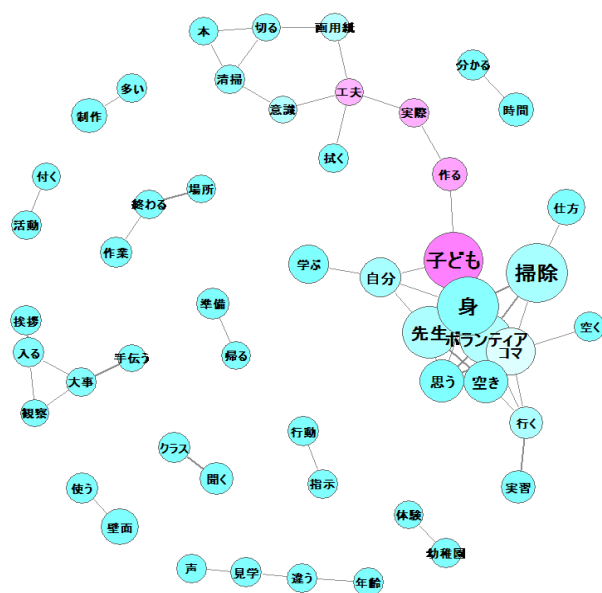


図 10 2018 年度 設問⑤ネットワーク図

<考察>

2ヶ年の比較から把握できることは、2017年度は具体的な自分の行為として、身に付けたことを述べているが、2018年度は頻出語からもネットワーク図からも身に付けた具体的な行為が読み取れないことである。

学生コメントを確認する。

2017年度は、「壁面の作り方のアイデアなどが身に付いた。隅々まで掃除することが身に付いた」「掃除の手順や少しの工夫」「子どもたちへの言葉かけや、子どもたちが楽しくなったり、ワクワクしたりするような活動前の導入の仕方」「切り取る部分にホチキスをし、ずれないようにすることができるということを知った」「周りを少し見られるようになった」「乾いた雑巾と濡れた雑巾を持って掃除すると速く綺麗にすることができる」と、端的に身に付けたことを述べている。

2018年度は「片付けや製作の準備など先生方からの指示が出たらすぐに行動することができたと思う。朝の掃除のときも先生方に言われる前に行動できたので自分にできることは率先して行うこと

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成Ⅱ

が身についたんじゃないかと思った」「汚れた床を拭くひとつの作業にしても、そのクラスによってどの雑巾で拭くのか、年齢によって、先生は見守りながら子どもにも手伝ってもらいこともあり、年齢やクラスによっても違うことがあった。まずは観察して先生や子どもの様子から、読み取ることが大事だと思った」とある。

つまり 2018 年度の頻出語やネットワーク図から、学生の具体的行為が読み取りにくかったのは、学生自身が行為の自己評価を含めて述べていることで、読み取りにくくなったと思われる。

(3) 学生が捉える空きコマボランティア体験の意味

設問の①②は見学実習の学びと身に付けたことに答えている。そのため、設問①の頻出語の第一位が「子ども」であることから分かるように、保育職を目指す学生の見学実習に対する意識は、子どもを第一義に考えて臨んだ姿勢がある。特に、コメント文字数が少ない 2017 年度は、子どもを中心に、環境による保育、遊びの環境構成に着目しているように読み取れ、遊びを継続させる環境構成の大切さに気付いたコメントある。また、頻出語から「挨拶」を身に付けたと述べていることが分かる。2018 年度はコメント文字数が多く傾向を読み取りにくく、「遊び」を通して保育が展開されるという意識をもたずに実習に臨んだと読み取れなくはない。しかし、「先生」に着目して実習しており、端的に身に付けたことだけを述べているのではないことが分かる。

設問③④⑤空きコマボランティアの内容と学び、身に付けたことに答えている。

内容は 2 ヶ年とも「掃除」は上位 1 位 2 位に出現しており、この取り組みの主旨である、保育という活動に入るまでの、保育職務能力である生活力を付けておくことを体感している、と捉えることができる。

2017 年度の学生は、空きコマボランティアの活動内容を簡潔に記述し、2018 年度の学生は活動内容から学んだことがら、自己評価まで記述している傾向が多く、単純に 2 ヶ年を比較することは難しかった。そこで学生コメントを丁寧に拾っていくと、空きコマボランティアの内容の大半である「掃除」からの学びとして、「キレイ」に環境を整える事で、子どもが明日の生活を気持ちよく始められると考えていることは 2 ヶ年とも共通していることが分かる。

また、設問④の頻出語では、半数以上の重なりで同義語と見なせる語があったが、2 ヶ年同じような空きコマボランティアの内容であっても、ネットワーク図が明らかに異なった。それは、2017 年度は少ない語彙数だが端的に学びを述べ、2018 年度は保育補助のできる 14 時までボランティアを行っている学生が少なく、明日の子どもの活動を予測して行った自らの活動を価値付けたのではないだろうかと推察できる。

空きコマボランティアで身に付いたこととして 2 ヶ年とも「掃除」を挙げ、次に壁面作りの技術を身に付けたことが分かる。

見学実習と空きコマボランティアでの学びと身に付けたことの違いは予測通りであった。

見学実習では、子どもの遊びから学ぼうとし、先生のかかわりや環境構成から学ぼうとしていることが把握できた。一方空きコマボランティアは、学生自身が実際に行った活動のからの学びや、具体的行為の手順やその行為を行う意味を学び取っている。つまり、3 年生で行う保育実習、教育（幼稚園）実習の前の、2 年生が自らの意思で空きコマを利用してボランティア活動を附属幼稚園で行う事は、具体的保育技術の根底を支える「生活力」をつけることの一助になっているといえる。

(4) 今後の課題

設問に対して今回は文字数制限をかけなかった。このことで、2 ヶ年の学生の抽出語総数に大きな違いがでた。具体的には、設問②の比較で述べたように、2018 年度の語は 2017 年度の語のほぼ 3 倍であった。このことから考察する際には、学生の実際のコメートを引用しなければ、ネットワーク図だけでは比較し考察することが難しかった。

例えば、設問④では、学生の学びが 7 つの島に分かれている 2017 年度に比べ、2018 年度は、ネットワーク図上で語と語が太い線で繋がっており、2018 年度の学生の学びの傾向が繋がっていることも読み取ることができた。これは情報量の違いなのか、学生気質の違いなのか読み取れなかったのである。

今後の課題として、2019 年度も文字制限せずに同じアンケートを実施し比較し、文字を制限することについても検討したい。また、継続して同じアンケートを実施しながら、保育者を目指す学生に必要な力を、その学年に合わせて見いだしていきたい。

結果と考察の最後に、各テキストマイニングに用いた各テキストデータに含まれる全ての語数（総抽出語数）、使用語数、何種類の語が含まれるかを示す異なり語数とその使用語数を表 6 に示す。

表 6 テキストマイニングに使用された各テキストの総抽出語数と異なり語数

年度	設問	総抽出語数（使用語数）	異なり語数（使用語数）
2017	1	4,511 (1,816)	793 (595)
2018	1	9,234 (3,412)	1,145 (908)
2017	2	1,795 (740)	422 (304)
2018	2	7,636 (2,766)	983 (765)
2017	3	2,668 (1,124)	518 (378)
2018	3	5,668 (2,213)	827 (628)
2017	4	4,081 (1,607)	772 (565)
2018	4	7,973 (3,004)	1,058 (826)
2017	5	1,398 (587)	339 (249)
2018	5	6,720 (2,572)	949 (734)

5. おわりに

乳幼児期にふさわしい生活を支える保育者として育つために、本大学に出来ることは、学内にある幼稚園と連携を取り、学生自身が 3 年生で行う保育及び教育（幼稚園）実習までに身に付けておきたいと思える考え方や技術、知識に気付く環境を作ることである。

本稿を通して把握できたこととして、小学校以前の教育は、少なくとも、子ども理解をすること、環境による教育であることを、学生は継続的にボランティア体験をすることで気付くことができていることが分かった。また、そのために今自分がなすべきことは何か、を考える機会が空きコマボランティアであったことは確かである。

保育者を目指す学生の職能形成に、継続的ボランティア体験効果が高いことが明らかになった。この空きコマボランティアを継続することで、個々の学生の保育者としての資質向上に繋げていきたい。

【参考文献】

- 1) 文部科学省 「幼稚園教育要領解説」フレーベル館，2018 年，p.50
- 2) 厚生労働省 「保育所保育指針解説」フレーベル館，2018 年，pp.89-117 pp.121-179
- 3) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館，2018 年，pp.159-221
- 4) 文部科学省 「幼稚園設置基準」『文部科学法令要覧』平成 23 年度版 ぎょうせい，2011 年，pp.428-429

保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成Ⅱ

- 5) 三宅茂夫 「第2章 よりよいカリキュラムを構成するために」 田中亨胤・三宅茂夫編著『教育・保育カリキュラム論【シリーズ知のゆりかご】』 みらい, 2019年, pp.40-47
- 6) 多田琴子 「保育者を目指す学生の生活力向上への試み」日本保育学会第71大会 宮城学院女子大学発表原稿, 2018年
- 7) 多田琴子・高松邦彦 「保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成」兵庫教育大学幼年教育・発達支援コース『幼年児童教育研究』第31号, 2019年, pp.45-55
- 8) Freeman, Linton C. Centrality in social networks conceptual clarification. *Social Networks*. 1978, vol. 1, no. 3, p. 215-239. <http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/0378873378900217>
- 9) 樋口耕一 「社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して— 第2版」ナカニシヤ出版, 2020
- 10) 樋口耕一 "KH Coder". <http://khc.sourceforge.net/>, (参照 2020-12-20)
- 11) 桐村豪文, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 野田育宏, 大森雅人, 足立了平, 光成研一郎, 中田康夫. 知のネットワーク成長モデル. *神戸常盤大学紀要*. 2016, vol. 9, p. 79-86
- 12) 高松邦彦, 伴仲謙欣, 桐村豪文, 野田育宏, 村上勝彦, 光成研一郎, 中田康夫. 知のネットワーク・タグモデル. *神戸常盤大学紀要*. 2017, vol. 10, p. 51-60
- 13) O, クワイン, ウィラード V. "論理的観点から～論理と哲学をめぐる九章～". 勁草書房. 1991, p. 62
- 14) カルダレリ, グイド, カタンツァロ, ミケーレ. "ネットワーク科学". 丸善出版. 2014, p. 70